

第1章 第2次計画の策定にあたって

1. 計画策定のあゆみ

近年、インターネット、ゲームなどの情報メディアの発達、スマートフォンの普及やSNSなどコミュニケーションツールの多様化などにより子どもたちの情報環境、生活環境が大きく変わりました。このような中、子どもの「読書離れ」が進み、その影響が懸念されています。

平成13年12月に公布施行された「子どもの読書活動の推進に関する法律（以降「推進法」という。巻末参考資料参照）」では、「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであるにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」（第2条）とされています。

推進法に基づき、国は平成14年8月に「子どもの読書活動の推進にかかわる基本的な計画」を策定（現在、第4次計画）、愛知県も平成16年3月に「愛知県子ども読書活動推進計画」を策定（現在、第4次計画）し、子どもたちの自主的な読書習慣の形成に向けた施策を進めました。

半田市でも、平成23年3月に対象期間を10年とする「半田市子ども読書活動推進計画」（以降、「第1次計画」という）を策定しました。中間である平成28年3月には第1次計画の内容を見直した「半田市子ども読書活動推進計画（後期分）」（以降、「第1次後期計画」という）を策定し、子どもの読書に関する施策を進めてきました。

今回、第1次計画対象期間が満了することから、国や県の動向、諸情勢の変化、半田市の子どもたちの読書活動の現状等を踏まえ、施策の見直しを図り、「第2次半田市子ども読書活動推進計画」を策定しました。

今後は、本計画に基づき、家庭・地域・学校等と図書館が連携し、子どもたちが、自主的に読書をする習慣を身に付け、多くの本と出会い、知識を得、感性を磨き、より良く生きる力を身に付けられるよう、子どもの読書活動に関する施策を進めます。

2. 第1次計画における取組の概要

(1) 家庭・地域における取組

乳幼児期から本に親しむ機会を提供するため、市立図書館では第1次計画策定前から保健センターで実施する3か月児健康診査の受診者に、乳幼児向けの絵本リスト「あかちゃんだってほんが好き！」を配布してきました。その後、健診受診後の親子に向けて、読み聞かせの大切さを説き、希望者に貸出券発行・ファーストブックの貸出を行う「赤ちゃんと絵本の出会い事業 あかちゃんとしょかん」を、半年間の試行を経て平成30年4月から開始しました。

また、乳幼児向けおすすめ本のリスト「どの絵本よもうかな？」を毎月発行し、子育て支援センターや児童センター、幼稚園・保育園・こども園や市立図書館などで配布しています。

市立図書館では、「読み聞かせ会」や「おはなし会」の内容を充実させ、親子で本に触れる機会を増やしてきました。また、乳幼児の保護者に向けた「えほん講座」を開催し、家庭での読み聞かせを支援しています。

地域においては、貸出文庫が増設（板山：H27、はんだっこ：H28、上池：H31）されたことで、子どもたちがより身近な場所で本に触れることができるようになりました。

児童センターへは、市立図書館から巡回文庫を届けること、読み聞かせやブックトークを行うことで、子どもやその保護者に読書の楽しさを伝えてきました。

また、夏休み期間中、学校で利用されない巡回文庫（後述）を活用し、「放課後児童クラブ」へ本の貸出しを行い、継続して本を利用できる環境整備に努めました。

(2) 学校等における取組

学校図書館においては、市内の学校の多くで計画策定時より蔵書が増えており、学校内における子どもの読書環境が改善されています。

平成23年度には、市立図書館から学校や幼稚園・保育園等へ年齢に応じた本を届ける「巡回文庫」事業を開始し、新しく本と出会う機会を拡充しました。

司書が学校へ出向いて行う「学校ブックトーク」やテーマに応じて本を届ける「調べ学習お届け便」によって、学校の授業でも子どもと本を結びつけることができています。

各学校で実施している「(朝の)読書タイム(=朝読:あさどく)」のほか、小学生全員に配布する読書通帳、希望する小学1年生への市立図書館貸出券の発行など、読書を習慣づける取組も進めています。

(3) 図書館における取組

市立図書館では、第1次後期計画の5年間で児童書の購入予算を約8%増やしたことで、新しい本の購入だけでなく、傷んだ本の積極的な買い直しをはかりました。これによって、所蔵冊数は計画当初より減少したものの、数年前・数十年前の刊行であっても「良書」と呼ばれる児童書を新しい状態で利用者に提供できるようになりました。あわせて、司書が年齢

別の読書案内「どの絵本よもうかな」「こどものほんだな（低学年向き）」「子どもの本だな（高学年向き）」「ティーンズの本棚（中高生向き）」を毎月発行し、おすすめの本を紹介してきました。

また、児童図書の分類表示を色ラベル方式から、学校図書館で用いている数字による分類方式に変更し、普段利用する学校図書館と同じ感覚で本を探ることができるようになりました。

児童向けの行事は、「ぬいぐるみの図書館おとまり会」や「おたすけブックトーク」などの新規開催で、10年前と比較し行事数・参加人数とも増えました。

亀崎分館では、遊びや食を通して本に親しむ催し（「ひみつきちづくり」「作って食べて読み聞かせ」など）を開催し、新しい切り口から読書へつなげることができました。

（4）子どもの読書活動に関する普及・啓発

平成 25 年度に、半田市出身の絵本作家・間瀬なおかたさんが、半田市立図書館のキャラクター「ブックくん」と「しおりちゃん」を生み出してくださいました。以降、図書館では発行する読書案内や行事のチラシ、平成 30 年度にデザインを一新した貸出券にも「ブックくん」と「しおりちゃん」を登場させ、親しみやすい広報を心がけてきました。

また、Facebook や Twitter など、SNS を利用した新しい情報発信も始めました。

（5）子どもの読書活動推進体制の整備・充実

この 10 年の間に、図書館の多くの行事を支えるボランティア団体が新しく発足しています。平成 29 年度に、ブックトークを専門に行う「えほんポスト」が「きりんの会」より分離独立。平成 30 年度には、図書館のボランティア育成講座により「あかちゃんとしょかん」の大きな要となるボランティア団体「あっぷっぷ」が誕生するなど、多くの人々が子どもの読書活動に携わるようになっていきます。

また、市立図書館と学校の連携の一環として、市立図書館職員と学校図書館担当教諭や学校図書館職員との情報交換会や研修会を開催しています。



3. 読書に関するアンケートの結果からみた今後の課題

令和2年度「読書に関するアンケート」

◆子どもの意識

「小学5年生及び中学2年生」を対象としたアンケート

㊦実施期間	： 市内小中学校依頼分	令和2年7月3日～17日
①調査内容	： 読書に対する意識、学校図書館及び市立図書館の利用状況	
㊧回収数	： 市内小学5年生依頼分	929枚（4枚）
	市内中学2年生依頼分	952枚（1枚）
	合計	1,881枚（5枚）…①

◆大人の意識

「小学5年・中学2年及び幼稚園・保育園等年中児の保護者、来館者」を対象としたアンケート

㊦実施期間	： 市内幼・保・小・中学校保護者依頼分	令和2年7月3日～17日
	半田市立図書館・亀崎図書館実施分	令和2年7月3日～31日
①調査内容	： 読書に対する意識、学校図書館及び市立図書館の利用状況	
㊧回収数	： 市内幼稚園保護者依頼分	160枚
	市内保育園保護者依頼分	361枚（10枚）
	市内小学5年生保護者依頼分	822枚（7枚）
	市内中学2年生保護者依頼分	877枚（2枚）
	市立図書館・亀崎図書館実施分	211枚
	合計	2,431枚（19枚）…②
	合計	4,312枚（24枚）…（①+②）

※（ ）はポルトガル語

この計画を策定するにあたり、子どもを取り巻く読書活動の現状を知るために4種類のアンケートを実施しました。本計画の対象年齢である0歳から15歳までを対象としたアンケートは、平成22、27年度に調査した数値と比較するため、当時の対象学年と同じ小学5年生、中学2年生を対象に実施しました。そのほかには、先回同様、図書館来館者を対象としたものに加え、新たに、小学5年生・中学2年生の保護者と、乳幼児期からの読書活動推進の参考とするため市立幼稚園・保育園・こども園・つくし学園に通う園児の保護者にも実施しました。

また、今回のアンケートでは、外国籍の市民が増えていることからポルトガル語に翻訳したものも作成しました。

なお、第1次計画においては計画の対象を概ね18歳までとしたため、平成22、27年度に実施したアンケート結果には「子ども」に16歳から18歳までを含んでいます。また、以前のアンケートと同様に、無回答を分析対象から外しています。

【アンケートの結果（抜粋）】

（子どもの意識）

○読書が好き、嫌いの割合

小学5年生

	平成 22 年度	平成 27 年度	令和 2 年度
好き	72.1%	84.1%	80.4%
嫌い	27.9%	15.9%	19.6%

中学2年生

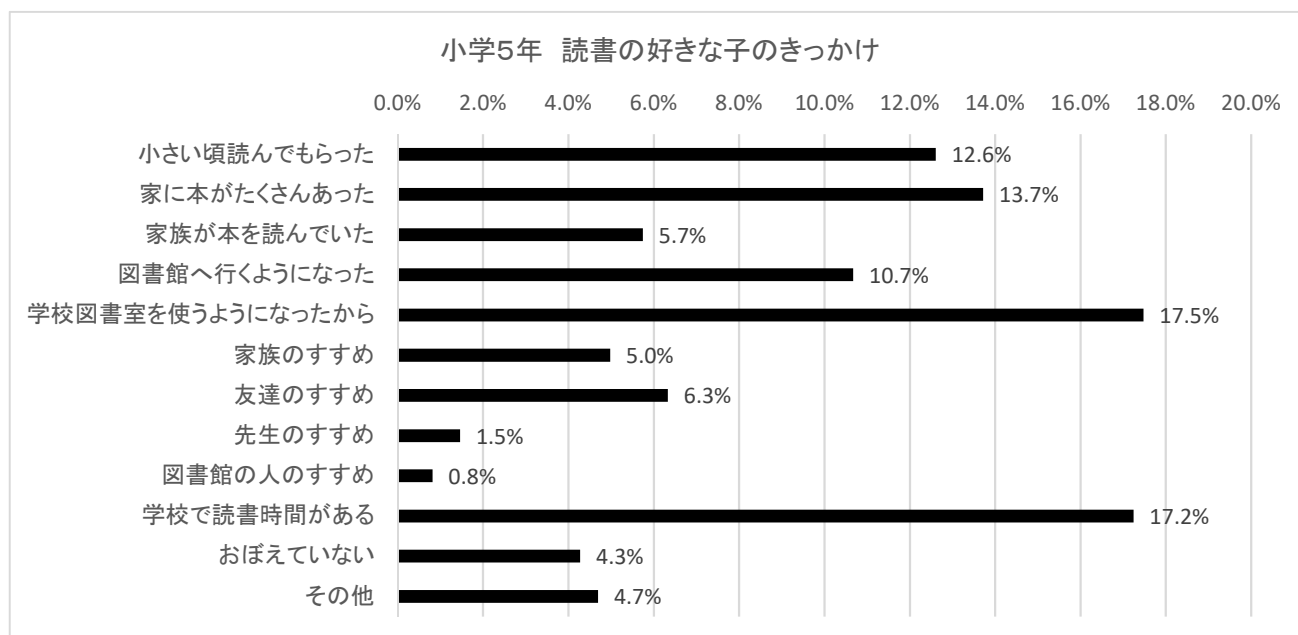
	平成 22 年度	平成 27 年度	令和 2 年度
好き	67.2%	72.1%	69.7%
嫌い	32.8%	27.9%	30.3%

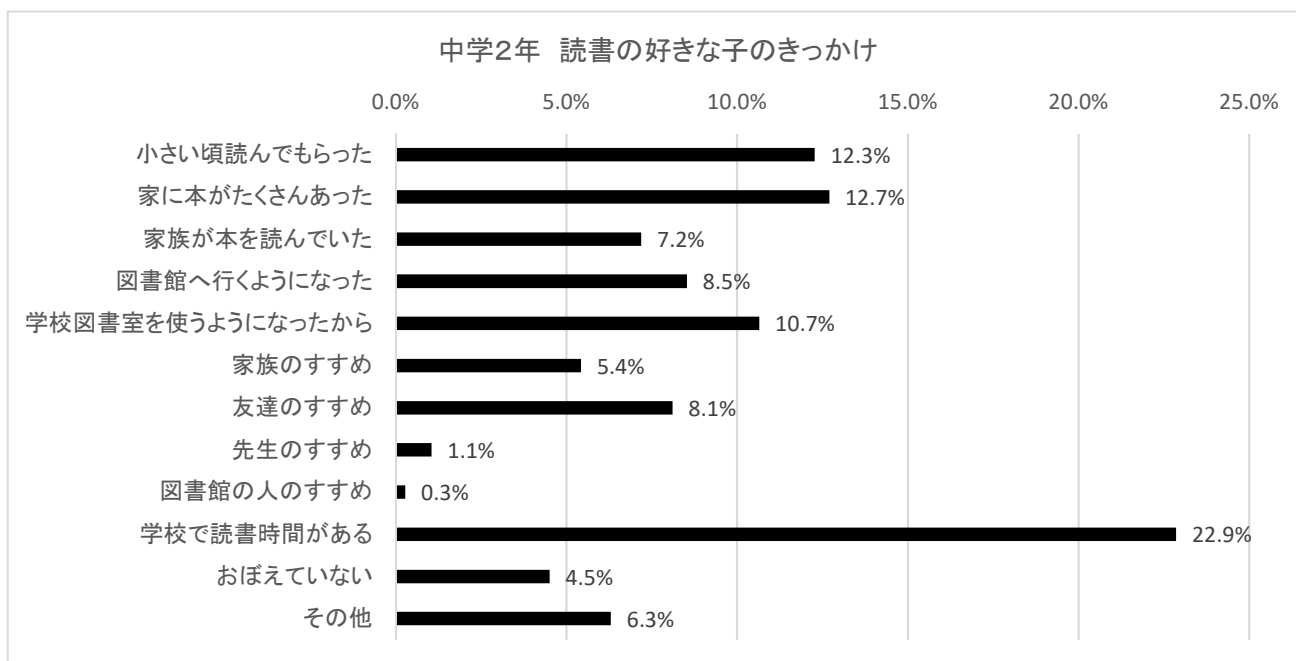
○不読率（1か月に1冊も本を読まなかった子どもの割合）

	平成 22 年度	平成 27 年度	令和 2 年度
小学5年生	10.3%	7.4%	10.3%
中学2年生	16.9%	11.4%	16.9%

平成 27 年度と現在を比較してみると、小学生・中学生ともに「読書が好き」と回答した子どもの割合が減少しています。また、不読率（1か月に1冊も本を読まなかった子どもの割合）については、小学生・中学生ともに増加しました。

○「読書が好き」と「読書をするようになったきっかけ」（クロス集計）

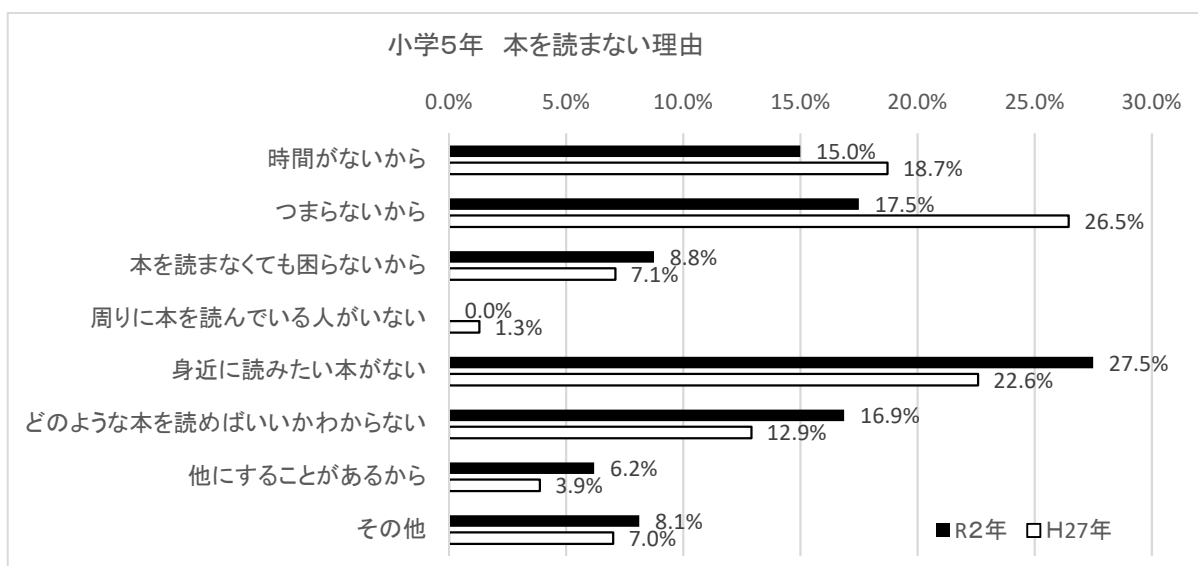


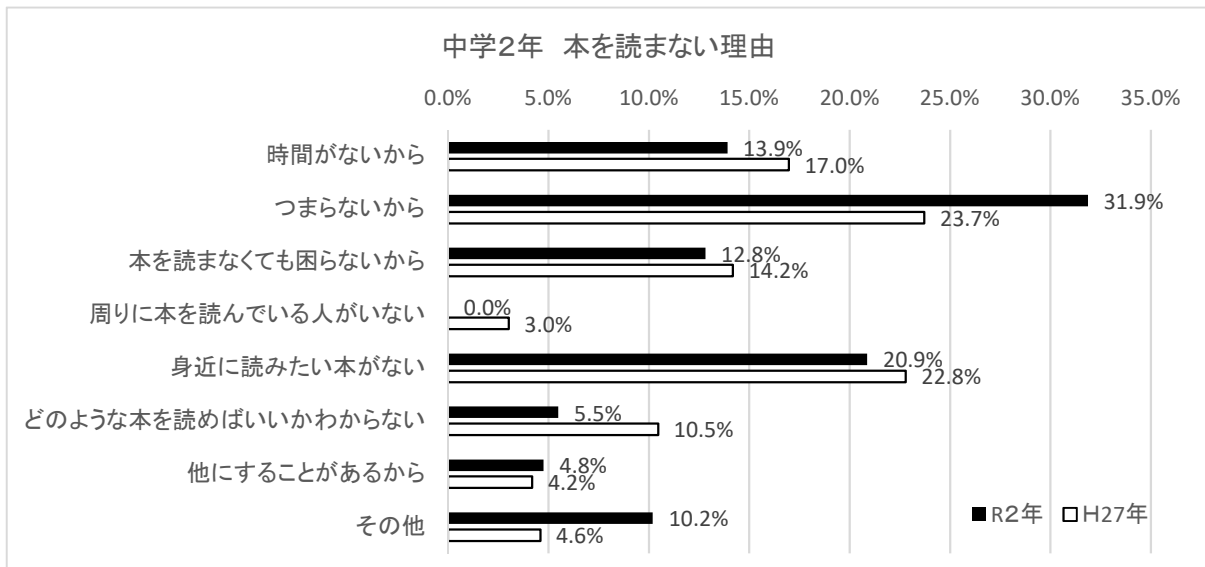


小学5年生では、学校図書室を使うようになったこと、中学2年生では、学校で読書時間があることが一番のきっかけとなっています。「学校図書館の利用」「学校での読書タイム」といった学校に関わるものが増えていますが、次に多いのは「小さい頃に本を読んでもらった」「家にたくさん本があった」でした。

以上のことから、身近なところで本に触れることが読書推進の鍵になることがわかりました。また、「家族のすすめ」「友達のすすめ」など、他の人の勧めで本を読むようになった子どももいることがわかりました。

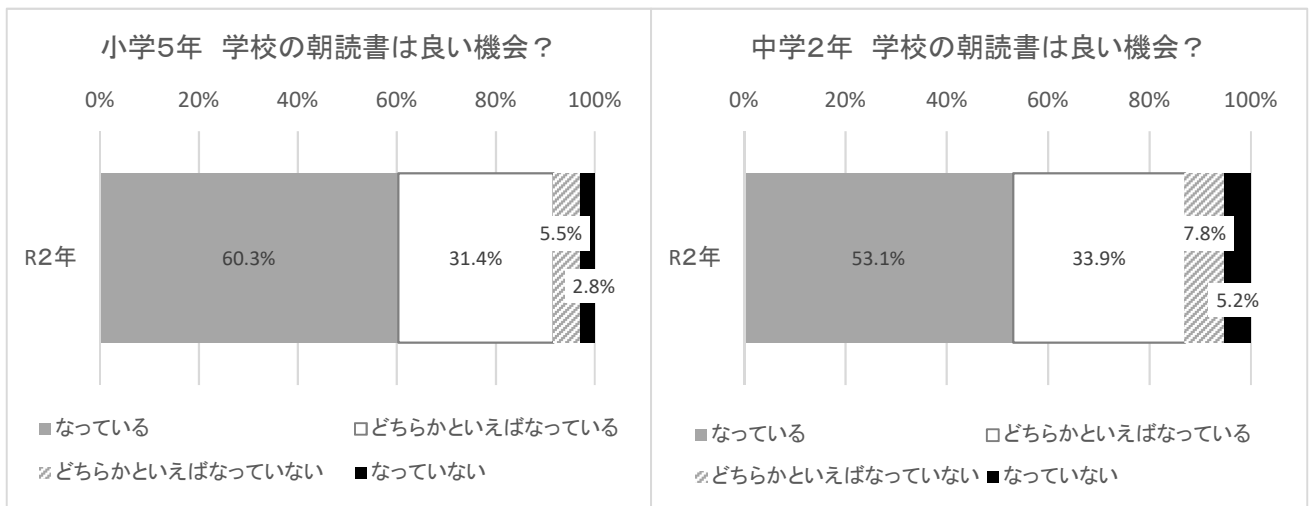
○本を読まない理由について





一方で、「本を読まない」と答えた子どもたちの理由をしてみると、「つまらない」「身近に読みたい本がない」が多く、子どもたちに本の楽しさを伝え切れてないことがわかりました。

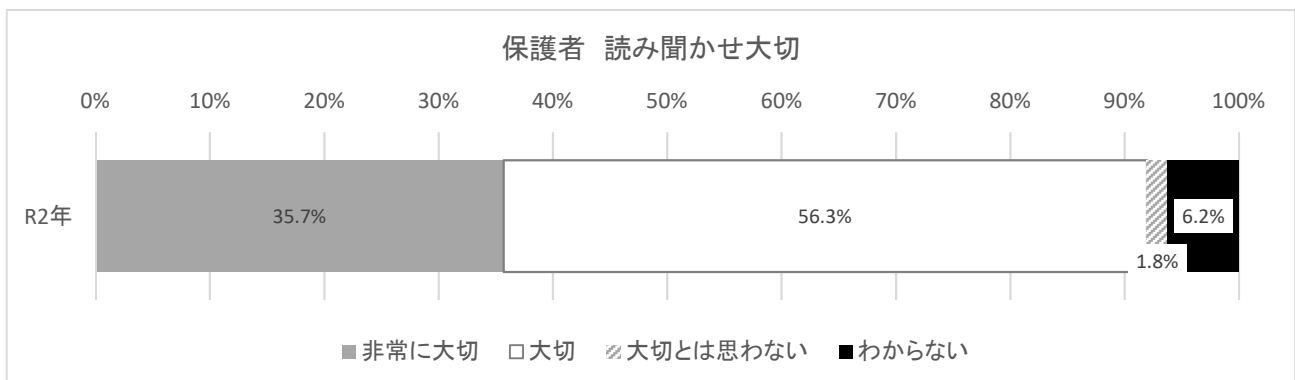
○学校の朝読書について



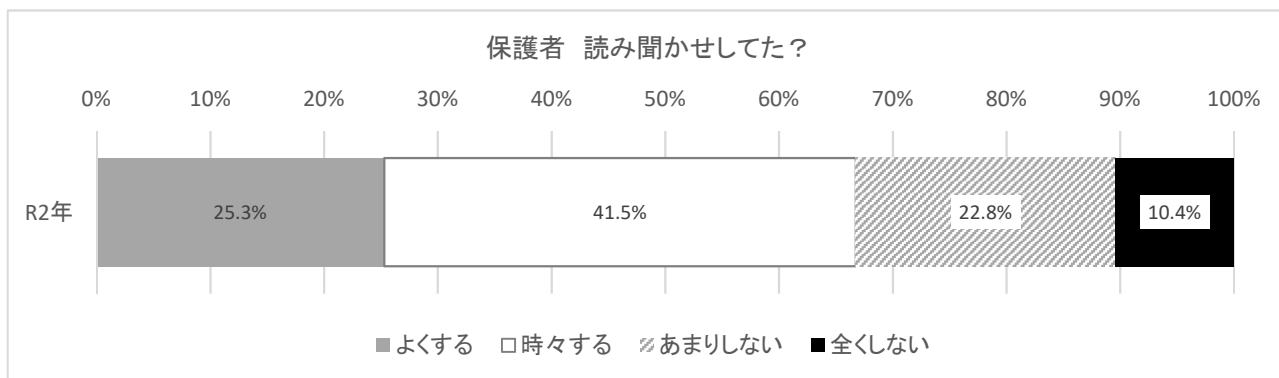
一番身近な場所である学校での朝読書の時間が本を読む良い機会になっているか尋ねたところ、小中学生ともに約9割が良い機会になっていると回答しました。

(大人の意識) ※一部子どもの意識含む

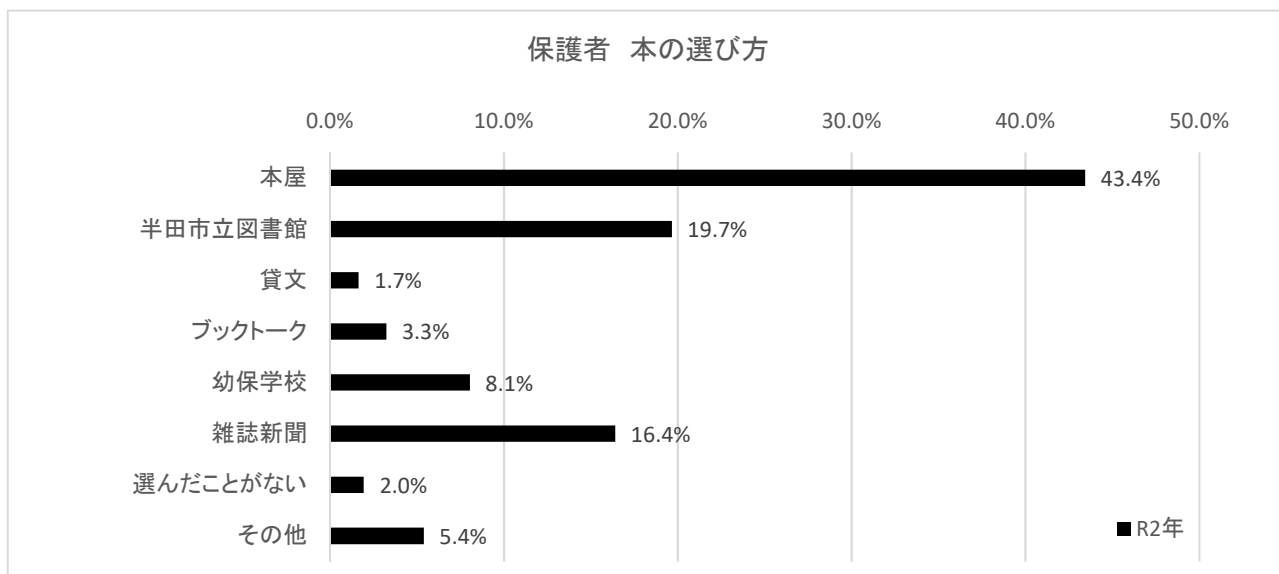
○読み聞かせは大切か？ (小学5年・中学2年保護者+幼保年中児保護者)



○読み聞かせをしていたか？（小学5年・中学2年保護者＋幼保年中児保護者）



○子どもの本をどのようにして選んだか？（小学5年・中学2年保護者＋幼保年中児保護者）



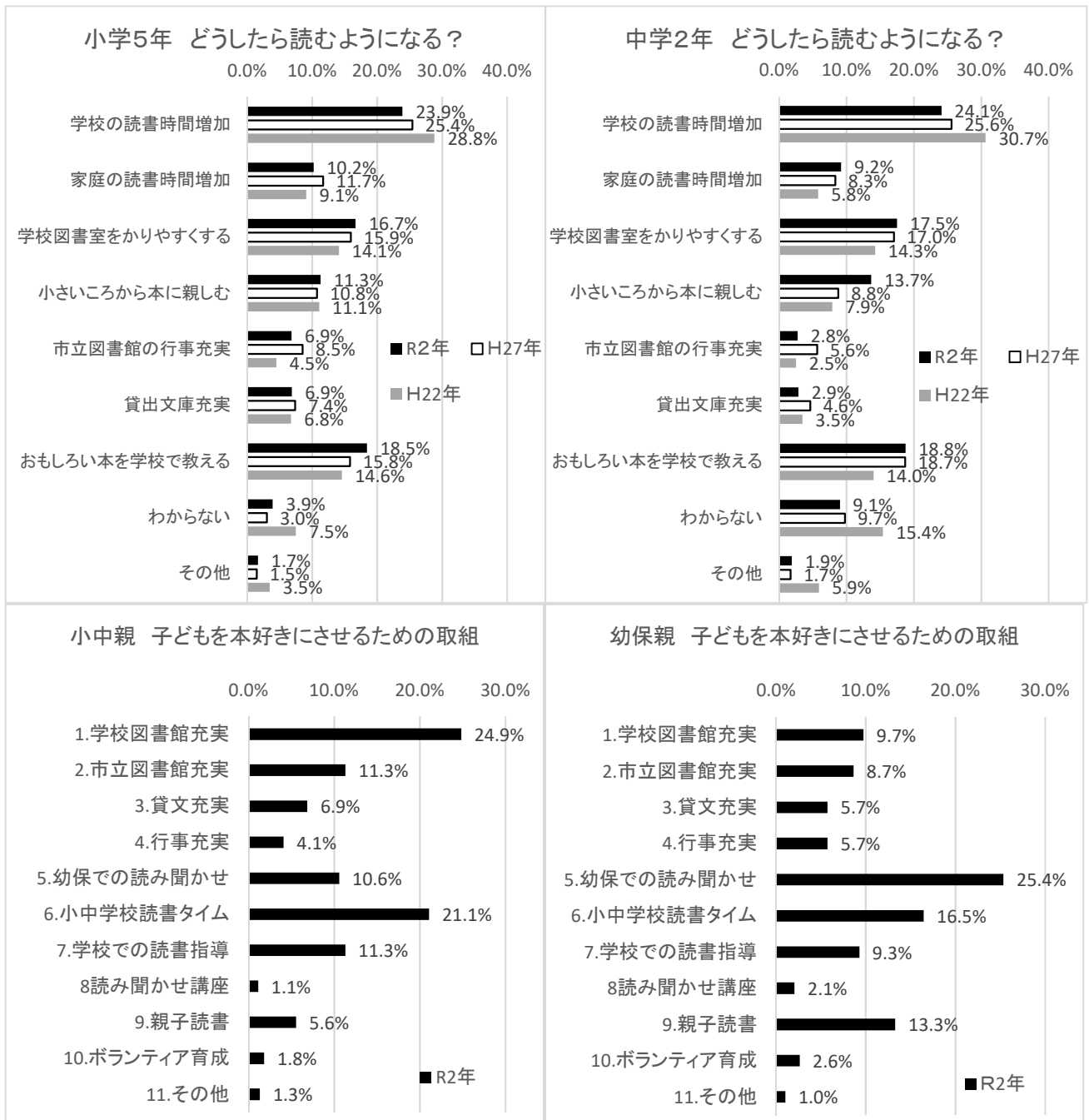
小学5年生・中学2年生及び幼稚園・保育園年中児の保護者へ読み聞かせについて尋ねたところ、「読み聞かせが大切」と答えた方は92%ですが、実際に読み聞かせをしている保護者は66.8%でした。

また、保護者は読みたい本を本屋で購入する割合が一番多いことが分かりました。



○どうしたら本を読むようになるか？

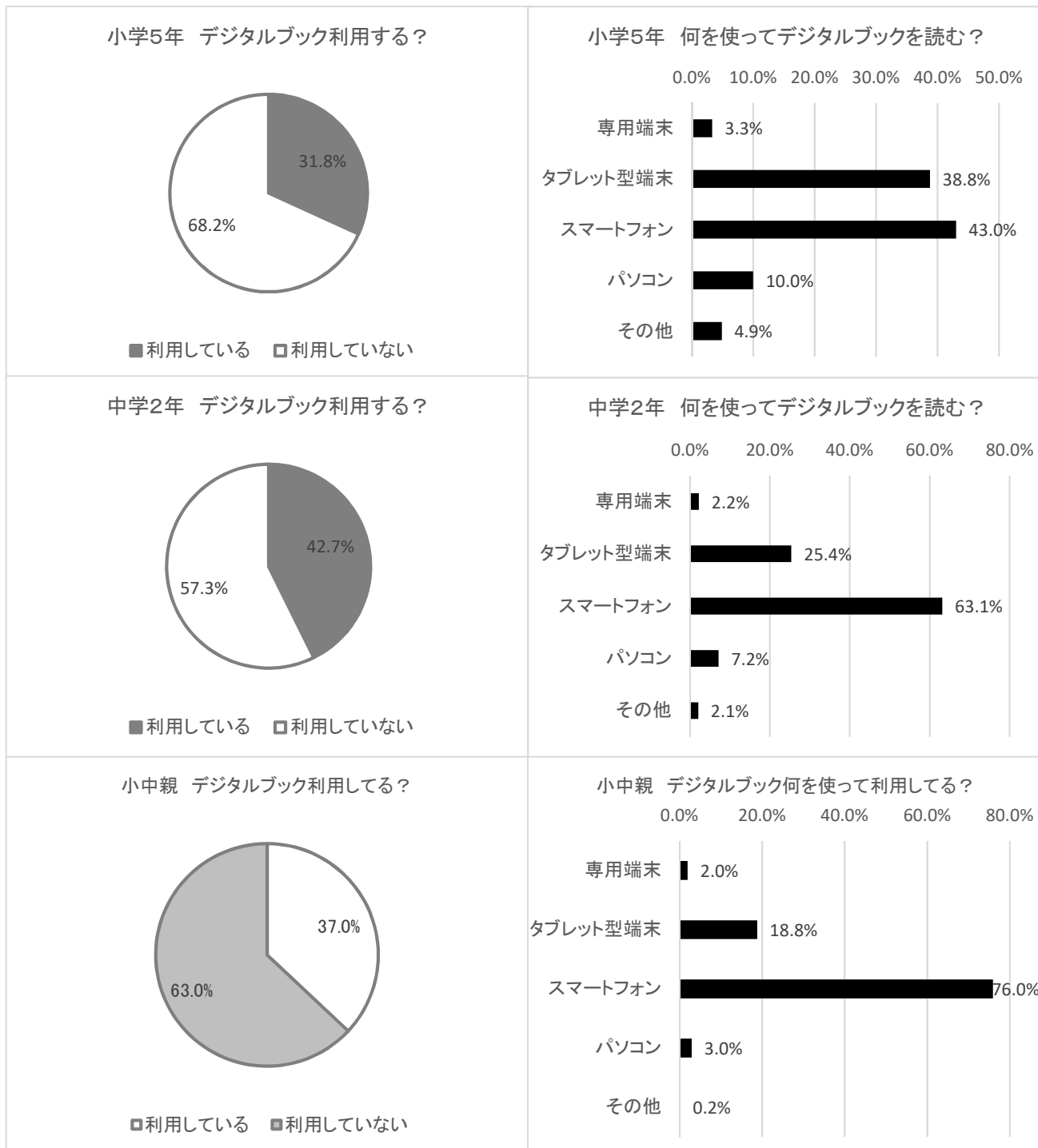
○子どもを本好きにさせるための取組【新規】



小学5年生・中学2年生へ「どうしたらみんなが本を読むようになるか」と、小中学生及び幼稚園・保育園等の保護者へ「子どもを本好きにさせるための取組」を尋ねました。子どもでは「学校での読書時間増加」と「学校などで面白い本や役に立つ本を教えてくれること」「学校図書室をかりやすくする」を選択した人が多く、大人でも「学校図書館充実」や「小中学校読書タイム」、「幼稚園・保育園での読み聞かせ」など、子どもが多くの時間を過ごす学校等での取組が必要と感じている人が多いことがわかりました。

また、その他回答として、たくさん本を読んだ子をほめる取組、子どもが子どもに本を読んであげるなど子ども同士で行う取組を挙げる意見がありました。

○電子書籍（デジタルブック）について【新規】



電子書籍を利用しているのは全体の約3分の1。中学生では4割強で、主にスマートフォン、タブレット端末で読んでいます。小中学生のその他には学習用タブレットが含まれています。

子ども、保護者ともに、ある程度の割合で電子書籍が利用されていることがわかります。

【まとめ】

これまで第1次計画に基づき、様々な取組を行ってきましたが、今回の結果を見ると、「読書が好き」の割合は減少し、不読率は増加しました。アンケート実施が、コロナ禍の学校長期休業後であったことが影響しているかもしれませんが、着実に成果を上げてきたところに水を差す結果となってしまいました。

子どもの意識として、読書が好きな子の読書をするきっかけは、「学校図書室を使うようになった」「学校で読書時間がある」との回答が多いことがわかりました。学校図書室や学校での読書タイムなど、身近なところで本に触れることが読書推進の鍵となります。また、「学校の朝読の時間が良い機会となっている」と答えた子どもが約9割いることから、朝読を今後も継続して実施していくことが重要です。さらに、学校図書館を利用しやすくすることや学校で面白い本を教えてもらうことが子どもたちにとって本を読むきっかけとなるようです。これら学校での読書に関する取組については、今以上に学校と市立図書館、その他関連施設との連携を強化することが必要です。

一方、大人の意識は、子どもを本好きにさせる取組として、学校図書館充実や小中学校読書タイム、幼稚園・保育園での読み聞かせなど、子どもたちが多くの時間を過ごす学校等での取組が必要と感じている人が多いことがわかりました。これら学校等での取組を進めるとともに、家庭での読書（「家読」）の啓発も進め、子どもたちが日常的に本に触れる機会を増やしていくことが必要です。また、子どもの本は書店で選び、買い与える保護者の割合も多く、図書館での貸出点数も減少していることから、図書館の利用についても啓発していく必要があります。

なお、子ども・保護者ともに、ある程度の割合で電子書籍を利用していることから、課外活動や塾通いで読書に時間が割けない小中学生や、仕事・子育てなどに忙しい保護者が時間や場所にとらわれずに読書を楽しめるよう、非来館型のサービスとしてスマートフォン等で読める電子書籍の貸出を行ってまいります。



新美南吉読書感想画コンクール 受賞作の展示